

公益財団法人やまがた教育振興財団
「教員養成に関する調査研究事業」
報 告 書

幼保小連携の充実に向けた
学生の児童理解力・校種間コミュニケーション力
育成に関する研究

令和2年3月

研究代表者
東北文教大学
准教授 下村 一彦

【研究の目的】

幼保小連携に向けては、様々な施策や養成校・現場の取り組みが行われているが、これまで必ずしも現場の成果に結びついていなかった。また、保育者を目指す学生の小学校教育を理解しようとする姿勢、小学校教諭を目指す学生の保育を理解しようとする姿勢も十分に育まれているとは言えない。

しかし、保育・幼児教育では、「幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿」という見通しが示されている他、カリキュラムマネジメントには「児童生徒の実態を踏まえ（山形県教員「指標」項目15：始発期）」ることが不可欠であり、小学校に入学してくる児童の実情を把握すること、実情を共有するための連携の工夫を知り現場で実践できるようになることは重要である。また、初任時に年長や小学校1年生の担任を担う学生も少なくない現実があり、在学中からの取り組みが求められる。

以上の観点から、本研究では、幼保小連携の意義や求められる視点を理解し、就学前施設（幼稚園・保育所・認定こども園）から小学校までの見通しを持った保育者と小学校教諭を養成するために、次の3つの目的でプログラムを学生に提供し、その指導の成果と課題をまとめた。

- ・学生の児童理解力を高めること、
- ・保育者と小学校教諭を目指している学生の相互理解を深めること、
- ・幼保小連携に対する学生の意欲を高めること

学生へのプログラムは、年長児クラスでの児童把握の実践的演習を中心とした現場での学びと、幼保小連携に関する先駆的な実践に関する報告者の調査成果の講義で構成した。なお、対象学生は4年次の学生で、保育職志望者と小学校教諭志望者を各9名、合計18名とした。

【研究概要】

まず、現場での学びに関しては、県内の異なる地域特性を踏まえた学びとなるように、山形県A町（C認定こども園とD小学校）とB市（E幼稚園とF小学校、G保育園とH小学校、I認定こども園とJ小学校）で提供した。学生に対しては、幼保小連携の取り組みの全体像と実践上の工夫や留意点を、園長と校長による講義を通して伝えるとともに、保育見学時の自身の視点や見取りを深める演習を行った。演習は具体的には、相互の児童観・教育観を理解し合う機会ともなるように、小学校教諭志望者と保育職志望者の混合グループで、見学時のエピソードを、写真を含めたドキュメンテーションにし、その発表での児童理解や視点に対して、年長クラスの担任から助言を受ける形式とした。

次に、県外の先駆的な取り組みの調査成果の講義では、2つの取り組みを報告した。

1つは、横浜市の飯島幼稚園と飯島小学校の取り組みである。両校園が遊びや体験を重視する教育観を共有し、教育内容の連続性を保証する環境を構築していること、特に小学校校庭の里山化への取り組みにより、学びの連続性が保証されたことを報告した。

もう1つは、長野県茅野市教育委員会の取り組みである。茅野市では、保育者と小学校教諭が互いの現場での1日を体験することを推進している。その取り組みの概要と取り組みを経た小学校教諭が子ども理解とともに子どもへの愛情をより深められたとの感想を寄せていることなどを報告した。

研究のスケジュールや学生の取り組みの様子を以下に示す。

時期	場所	内容
2019年 9月26日	【先進事例調査】	午前：横浜市立飯島小学校（写真1：ススキでトンボの産卵場造り） 午後：学校法人三橋学園飯島幼稚園（写真2：ヤギ・アヒルなどを飼育）



(写真1) ヤゴは幼稚園児も採集して育てる。



(写真2) 小学校にも続く飼育活動

10月11日	【先進事例調査】茅野市教育委員会こども部	
10月18日	大学	・ 守秘義務の順守や保育見学時の留意点を確認する講義
10月21日	E園	・ 学生による事前レポートの提出
10月23日	C園	・ 午前は、保育の見学による園全体の把握 (写真3：里山での丸太渡り)
10月28日	G園	・ 午後は、各園長とD・F・H・J小学校長による講話
10月31日	I園	(写真4：園長と小学校長が同席する講話)



(写真3) G園での園外保育の見学



(写真4) C園長とD校長の講話後の質疑応答

2020年 2月10日	C園	・ 午前に年長児の保育を見学 (写真撮影を含む)
2月12日	I園	・ 各グループでドキュメンテーション作成
2月13日	E園・G園	※学生には、事前に後掲の<資料Ⅲ>を用いて指導



(写真5) 凍結した沼で遊びを一緒に体験



(写真6) 掃除の様子を写真に記録

2月15日	大学	・ 4園でのドキュメンテーションの報告・検討会 ・ 茅野市と横浜市の事例の講義
3月上旬	大学	・ 学生による事後レポートの提出

まず、園長と校長の講義では特に、C園を卒園した小学生がクラスでの話し合いに積極的に参加している写真を交えて、「まだ1年生」ではなく、「もう1年生」という思いで受け入れているという校長の講話が、児童理解に向けた学生の視点を深めたようである。それは、「小学校だけに視点を当てると、1年生はあまり自分たちで問題解決ができないと思われがちである。だからこそ、けんかななどのトラブルになった時は、最初から先生が間に入って解決するという様子も小学校現場では見られる。教師の『1年生』という言葉から連想するイメージによって、子どもの成長を邪魔してしまっていることもあること、1年生でも自分たちでできることがたくさんあることを学んだ。」という事後レポートの記述に表れている。

次に、ドキュメンテーションの検討会では、たとえば、C園でのドキュメンテーションにおいて、物の性質に対する幼児の関心や理解に焦点をあてた学生に対して、当該幼児の好奇心が旺盛な反面、切り替えが苦手という特性を踏まえて、エピソード場面後の昼食への移行がスムーズだったことに着目した担任保育者の補足があったことで、児童理解や保育者・教育者の姿勢への理解が深まっていた。「ドキュメンテーションの作成では、見せることの目的を考えながら撮ること、前後の動きをとらえることが大切だと学んだ。」などの学生レポートからは、子どもの遊びも子どもなりの必然性があり、その必然性を明らかにして子どもの遊びをとらえる必要があることに気付いている学生の姿が読み取れる。これは、保育者はどんな情報をもとに遊びの環境を整えるか、小学校でいえばどんな学習環境や授業過程を構築するかを考える上で大きな学びになったものと考えられる。

また、I園でのドキュメンテーションにおいて、版画制作の中で発見を楽しむプロセスに着目したことで、年長児の気づきを取り上げた学生に対して、他の小学校教諭志望の学生から担任保育者に対して、版画制作での左右対称は伝えていかないのかという趣旨の質問が出た。それに対して、遊びのねらいが感覚を楽しむことにあったことを踏まえた上で、版画の左右対称の仕組みを「教える」のは就学後でも良いとの考えを示した担任保育者の姿勢は、接続期に限らず、子どもの気づきを尊重する教育者の基本姿勢として、学生に大いに示唆を与えたと思われる。

なお、上述の昼食への移行を含めて、4園での見学を通して見られた幼児の主体的な姿に対して、小学校教諭志望学生からは、「小学校を希望していたのですが、幼稚園や保育園の教師に魅力を感じます。小学校では1年生の学級経営で先生が苦勞している様子を見ています。幼稚園や保育園ではあんなに自由に遊んでいてもはみ出す子どもがいない。こういうクラス経営をしてみたいです。」という感想も寄せられた。今回の学生の学びは、なぜ小学校の1年生は幼稚園や保育園の子どものように自分たちで活動できないのか、小学校で幼稚園や保育園の子どものように活動させるためにはどうするか、という課題を再認識する機会にもなったと思われる。当該学生を含む参加学生が、自分のクラスを担当し、実際に学級経営をする中で、課題と深く向き合うことが期待できる。

【研究成果と課題】

上述の事後レポートの記述にも見られたように、学生はプログラムを通して多くのことを学んでいるが、本研究の3つの目的ごとに、学生のレポートを分析し、本プログラムの成果と課題を整理する。

(1) ドキュメンテーションの作成・発表による児童理解の深化

「ドキュメンテーションを作成するにあたって、見られた子どもの姿からその子どもの気持ちや内面的な部分を考察しながら作っていたが、保育者から助言を頂く中で、子どものこれまでの姿と見解を聞

くことによって自分がしていた考察と比較したりまた新たに考察したりすることができ、その子どもについて深く考えることができた。」とのレポートにあるように、担任保育者が検討会に加わったことの意義は大きい。

(2) 学生間の相互理解・認識

プログラムを通して「小学校系はじっと観察するのかなと思っていたけど、子どもの遊びの中に混じって言葉掛けをして遊びが発展していた。じっくり子どもの話を聞いていて、私も真似したいと思った。」と、見学を共にする中で好意的に受け止める様子もあった。しかし、「保育は個人にあった援助を関わる中で見出すが、小学校は個人よりクラス全体への指導を考えることが多そう。」と否定的な印象を抱いていた保育者志望学生や、「遊びに対する知識やスキルはあると思うが、学習へ向かわせる知識やスキルは有しているのだろうか？」と不信感を抱いていた小学校教諭志望学生は、事後レポートでも大きな変化がない。期待していたほどコミュニケーションが深まらなかったことは課題である。

(3) 連携への意欲

飯島小学校の取り組みに対して「自然豊かな環境を小学校に取り入れていて、学習内容だけでなく、環境を通して子どもの安心感に繋がられるということを学んだ。」というレポートなど、理解と意欲を深めていることが伺われた。また、園長と校長が互いの実践や方針を信頼し合う姿が見られたことで、連携の土台となる校園間の信頼関係を構築することの重要性に意識が向いたようである。そのことは、6名の学生が事後レポートで茅野市の小学校教諭による1日保育士体験に言及し、子どもの実際の様子を共有すること、現場を体験することの意義を認識していることにも表れている。

【まとめ】

本研究でのプログラムは、4年生18名を対象とした。10月の4園でのプログラムはC園には全員、他の3園には各6名が予定通り参加したが、2月は、体調不良に加えて就職内定先との日程の重複があり、10月に各自が訪問した園を再度訪問し、ドキュメンテーションを作成したのは10名（小と保の志望者は各5名）、検討会に参加し事後レポートを提出したのはその10名の内の8名（保育5名、小学校3名）であった。分析対象が少なく、数量的傾向の検証が不十分となってしまったことは課題である。

ただし、学生による全てのドキュメンテーションが児童を肯定的にとらえる中で、担任保育者からの助言を通して、学生の児童理解は深められたと認識している。しかし、2月の参加学生減少への対応として、グループに複数のドキュメンテーション作成を求めたことで分担がなされてしまい、学生間の語り合いも不十分であった。また、環境構成や校種間の相互体験への意識が高められたことは先進事例を紹介した成果であったが、保育者志望学生の小学校での体験への意識を高めることも今後の課題である。

最後に、本研究は、第一義的には、小学校教諭と保育者を目指す学生の資質向上を通して幼保小連携の充実を目指すものであるが、共同研究を通して、養成校教員が専門分野を超えて相互理解を深める契機ともなった。また、学生が視覚的な情報を共有しながら児童について話し合うことの有効性への認識を共有することもできた。学生にとっても教員にとっても意義のあるプログラムとなったと認識しているが、そのことを研究で実証する上では、接続期の2月に就職が内定している4年生を対象とすることに限界があった。今後は3年生対象での実施やカリキュラム内での実施を検討したい。